

## 「フジコー技報によせて」

川崎製鉄(株) 社長  
數土 文夫  
Fumio Sudo



山本厚生社長と初めてお会いした時のことは、非常に印象深い思い出として、私の心に焼き付いています。当時、山本さんはお父様の意志を継いで社長に就任されたばかり。私も千葉製鉄所第三製鋼工場のQ-BOP担当課長に着任した頃の頃でした。

山本さんと私は同じ年ということですぐに打ち解け、いろいろな話をしました。四十歳にも達しない年齢で社長の任に就かれ、真剣にご自分の会社の経営思想を語られるその姿に感動し、私自身も大いに啓発されたことを記憶しています。山本さんのお話から、「経営の中心を技術開発に置くこと」、「社員を家族同様に思っていること」、「堅実な経営を貫く決意であること」、が切々と伝わってきました。

山本さんとはその後も交流が続き、気がつけば、初対面の日から既に二十年以上が経過しています。しかしながら、私の山本さんに対する印象は、熱く経営思想を語られたあの日のままで些かも変わることもなく、今日に至っている次第です。

振り返ってみますと、フジコーさんのお付き合いは、私の入社当時にまでさかのぼります。まだ平炉の造塊全盛時代、鑄型は急熱・急冷の熱パターンを受けるためその痛みは激しく、いかに鑄型修理の原単位を下げるかが、重要なコスト削減項目でした。この課題に対して、フジコーさん(当時、富士工業所)には一方ならぬご尽力をいただき、我々は大幅なコストダウンを成し遂げることが出来ました。

また少し時代は飛びますが、昭和63年、我が社は「鑄込み圧延クラッド鋼製造技術の開発」で大河内記念生産賞を受賞いたしました。当時、クラッド鋼の

生産方法は、組み立て法と呼ばれるものが主流であり、あらかじめ表面メッキを施した厚板を数枚重ねて、周囲を完全に溶接してから圧延していました。このため大変なコストと手間がかかり、お客様からのニーズは高いものの、残念ながらクラッド鋼は、価格・生産性から、発展性に欠ける材料であったのです。そこで、私たちは何とか、普通一般の造塊プロセスを用いて、大量に安価なクラッド鋼が製造できないかと、新たな目標に挑戦することとなりました。

この時に、お力を貸してくださったのがフジコーさんでした。鑄込みクラッド鋼は、鑄型の中に芯材スラブを吊り下げて置き、その廻りを下注ぎで溶鋼を注入して製造します。その際のポイントは、芯材スラブと鑄込んだ鋼層の間にいかに不純物をトラップさせないか、ということです。この点に関して、フジコーさんは、鑄型内面の研磨技術・芯材スラブ表面の加工技術で大きく貢献してくださいました。鑄型内という系全体の清浄性が見事に保たれ、芯材スラブと鑄込んだ溶鋼との接着性が非常に優れた製品が完成し、私たちの目標は首尾よく達成されました。

開発当時は文字通り、寝食を忘れてがむしゃらに取り組んだと記憶しています。思い出すほどに、ともに汗を流してくださったフジコーさんへの感謝の気持ちがこみ上げてまいります。

フジコーさんと仕事をする中で、私が一番感じたことは、エンジニアの皆さんが技術開発に大変熱心で、不撓不屈の精神で邁進されている、ということでした。平炉時代に鑄型修理をお願いした時も、また鑄込み圧延クラッド鋼の開発にご協力いただいた

時も、フジコーの方々は創造と変革の意欲をもって、技術開発に惜しみない努力を重ねてくださいました。この技術開発志向は、山本社長が初対面の時に語ってくださった理念そのものであるのです。

それを何よりも象徴しているのが、この「フジコー技報」の存在ではないかと思います。1993年に発行され、着実に号数を重ねられているこの技報には、フジコーさんの貴重な技術開発の成果が収められています。我が社の場合もそうですが、技報は研究者・エンジニアにインセンティブを与え、彼らの育成を促し、技術開発を活性化する役割を果たしています。多忙な毎日の中でも、このような論文発表の場を社員の皆さんに与えているのは、山本社長の技術に対する情熱、同時に社員の皆さんに対する愛情からに他ならないでしょう。

山本社長が社員思いでいらっしゃる、ということは、彼と接する中でいつも感じるのですが、特に私がその思いを強くしたのは、大分県湯布院にある「秀江苑」にお招きいただいた時でした。

「秀江苑」は、もともと山本家の別荘で、山本さんのお父様でいらっしゃる山本秀祐さん（フジコー前身の富士工業所の創業者）がこよなく愛した土地であるということで、風光明媚な湯布院に建設されたとうかがいました。また、「秀江苑」という名前は、山本さんのご両親のお名前から一字づつとり命名されたとのことでした。

お話を聞いて、山本さんがいかに愛情溢れるご家庭に育ち、ご両親を大切に思っているかが伝わってきました。また、ご自分達の別荘を、保養所として社員の皆さんに提供したと聞き、山本さんは社員の皆さんに、ご家族と同様の愛情を注いでいらっしゃる感じ、深い感銘を覚えました。

創業者の山本秀祐さんは、終戦復員の頃から、「日本には資源がない。リサイクルして資源を再利用すべきだ」と考え、この理念で富士工業所を興し、インゴットケースの亀裂・溶損の溶接補修に着手されたとうかがっています。この「リサイクル」という

コンセプトこそ、まさに今この時代、全世界的にその必要性が叫ばれているものであり、先見の明がありだったと感服せざるを得ません。

また、フジコーさんの手掛ける事業分野は、出発点の鋳型修理に始まり、溶射技術、溶接材料の製品技術、表面処理技術、さらにはCPCに代表される特殊鋳造技術と、時代とともに広がりを見せていますが、その根底には「物や資源を大切にする」という思想が見事に貫かれています。

加えて、「技術最重点」という理念にきちんと軸足を置き、少しもブレることなく、鉄鋼業の目まぐるしい変化にしなやかに対応されているという堅実経営こそ、フジコーさんの強さの原点であると、私は確信しています。

余談ですが、フジコー技報（第6号）に随想を寄せられ、「CPCハイス素材の鍛造」等でフジコーさんと共同研究されている佐藤祐一郎博士は、私の最も尊敬する先輩の一人であります。富山県で大平洋製鋼(株)の社長としてご活躍され、私とは同郷ということから、始終教えをいただいております。

またうかがうところによれば、佐藤博士は、山本さんのお父様とも面識があり、当時は「白銑鍛造」の佐藤社長、「白銑肉盛」の山本社長」で有名でいらっしゃるということです。

佐藤祐一郎博士という素晴らしい先輩を共に持っていること、これもフジコーさんとのご縁ということかもしれません。

冒頭で記しましたように、私が初めて山本厚生さんとお目にかかったのは彼が社長に就任した直後の頃。また、私が川崎製鉄の社長に就いた今年、フジコー技報に巻頭言を寄せることになったのも、何かのご縁という気が致します。今後とも末長いお付き合いをいただきますよう、お願い申し上げます。

また、僭越ながら、技術開発最重点という理念を貫かれ、今後とも時代のニーズに対応した素晴らしい技術・事業を展開されることを祈念し、巻頭言を結ばせていただきます。

【略 歴 書】

數 土 文 夫

昭和16年3月3日生

【学歴】

昭和39年3月 北海道大学 工学部冶金工学科 卒業

【職歴】

昭和39年4月 川崎製鉄株式会社 入社

昭和54年7月 千葉製鉄所 第三製鋼課長

昭和61年7月 同社水島製鉄所製鋼部製鋼技術室主査兼同企画部企画室主査（部長補）

昭和62年7月 ♪ 水島製鉄所製鋼部次長（部長補）

昭和63年7月 ♪ 水島製鉄所製鋼部長

平成4年4月 ♪ 水島製鉄所企画部長

平成4年7月 ♪ 理事 水島製鉄所企画部長

平成6年6月 ♪ 取締役 鉄鋼開発・生産本部千葉製鉄所副所長

平成7年6月 ♪ 取締役 鉄鋼開発・生産本部千葉製鉄所副所長、同製鋼部長

平成8年7月 ♪ 取締役 鉄鋼企画部長

平成9年6月 ♪ 常務取締役

平成10年7月 ♪ 常務取締役 経営企画部長

平成11年7月 ♪ 常務取締役

平成12年6月 ♪ 代表取締役副社長

平成13年6月 ♪ 代表取締役社長就任（現在に至る）